

「英語を使える」人材の育成

— コミュニケーションの本質を問い直す —

英語科 北野 真理恵

本校はSGH（スーパーグローバルハイスクール）指定3年目を迎えた。グローバルリーダーが備えるべきと本校が考える人間力の1つに英語運用能力がある。何ができると英語運用能力が高いと言えるのか。学校内外では、英語運用能力に加え、コミュニケーション能力という言葉も頻繁に飛び交っているが、そもそも生徒が身につけるべき態度あるいは技能とは具体的に何なのか。本稿は、これらの問いに挑むなかで行った指導に関する実践報告である。

キーワード：コミュニケーション 話し方／聞き方 対話への貢献 帯学習
パフォーマンステスト

1. はじめに

グローバル教育が推進され、コミュニケーション能力、とりわけ英語の重要性が叫ばれて久しいが、「日本人は英語ができない」というイメージは今なお強いように思う。日本という国は、ほとんどの人にとって、日常生活において英語を使う必然性がない。そのため、学校で習ったことが実生活に結びつくという経験が、英語については特に得られにくい。それでも、「英語を使える」人材の育成は学校が避けて通ることのできない課題となっている。

私は、公立中学校で5年間教え、平成26年度より本校に勤務している。公立中学校から県内有数の進学校へ移り、当然のことながら指導内容は一変した。しかし、「英語を使える」人材の育成に関して意識することは、中学校で教えていた頃と変わらない。「英語は言葉であり、言葉はコミュニケーションツールである。コミュニケーションは相手があって初めて成立するものである。つまり、英語を使うことは、必然的に相手の存在、自分－相手間の双方向のやりとりを前提とする。」私は、このような認識のもとで、日々の授業を行っている。

本稿では、担任を務める69回生の「コミュニケーション英語」における取り組みについて報告する。

2. 本校生徒の実態

本校では、生徒の入学時における英語力を把握することを目的に、入学直後にGTEC for STUDENTSを全員で受験している。過去3年間、67～69回生の1年4月におけるスコアは以下の通りである。

資料1 過去3年間のGTEC for STUDENTSのスコア

	総合	Reading	Listening	Writing
69回生	521.8	200.0	203.8	118.0
68回生	518.2	196.5	202.8	118.9
67回生	511.2	197.7	193.9	119.7

「聞く」「読む」「書く」の3技能については、入学段階ですでに全国の高3平均461を大きく上回るスコアである。

入学時における「話す」技能を客観的に示すデータはないが、生徒の多くは英語を話すことに自信がなく、抵抗感が強いというのが実情である。本校着任一年目に68回生の「コミュニケーション英語Ⅰ」

を担当したが、1年間の指導を通じて痛感したことは、生徒にとっては「相手に伝えることよりも、自分が発信することが優先される」ということだ。これは、コミュニケーションは相手があって初めて成立するという前提を完全に無視しているという点で大問題だと危機感を抱いた。また、この意識こそが「英語を使えない」原因の一つだと確信した。相手の存在を軽視する結果、「アイコンタクトやジェスチャーを交えてコミュニケーションをとることができない」「事前に準備し練習したものを話すことはできても、即興で対話を発展させることができない」という生徒が多くいた。1年間では、生徒の意識を変えるに十分な気づきを促すことができなかったと反省している。3年間持ち上がりで指導すると決まった69回生との3年間で、生徒がどれだけ自信をもって英語を使うようになるかが私の挑戦である。

3. 「コミュニケーション英語」における実践

(1) オリエンテーション

「コミュニケーション英語」の1回目の授業では、決まってオリエンテーションを行う。1年生のオリエンテーションでは、自己紹介を兼ねて隣の人と数分間英語で話をさせた後に、「I like music.」に対する応答をできるだけたくさん挙げる」という課題を出した。筆記試験で高得点を出す生徒だけあって、正確な英語を次々と書き出し、多い生徒では20個以上挙げることができた。たくさん思いついたことを褒めてから、授業冒頭の会話で使ったものに印をつけるよう指示した。知っていても使えない表現が多いこと、相手の発言にリアクションを返していないことに生徒自身が気づくことこそ、この活動のねらいである。周囲が課題だと感じて、自らが課題と感ぜない限り、練習は苦痛であり、長続きしない。生徒の気づきは、生徒が課題を課題と認識するために不可欠であると感じている。

オリエンテーションを通して、生徒と教師が課題

の1つを共有することができた。平成27年度からの3年間は、自信をもって英語を使う生徒を育成することを旨とし、①相手を意識した話し方／聞き方を身につけることと、②対話を継続することに重点を置いて取り組むこととした。

(2) 帯学習とパフォーマンステスト

まず、生徒が1対1での対話を多く経験できるように、帯学習を取り入れた。週3回の授業のうち、1回は単語テストを行うため、帯学習を行うのは週2回である。帯学習に充てるのは授業冒頭の約5分である。できるだけ頻繁に練習することが望ましいが、難関大や医学部を含む大学入試への備えを軽視することのできない本校の事情を考慮すると、これ以上回数、時間を増やすことは難しいと考えた。帯学習のテーマとねらいは学期ごとに設定した。活動の成果に対する評価は主にパフォーマンステストで行った。各学期における取り組みは資料2に記した。

また、教科書本文の題材に関するプレゼンテーションや音読テストも定期的実施し、帯学習と合わせて、音声による英語使用を評価する機会を多く設けるようにした。2年2学期終了段階までに、パフォーマンステストを10回実施した。実施時期と内容は資料3に示す通りである。

資料2 帯学習／パフォーマンステストの取り組み

1 年	1 学期	活 動	English Chat	
		ねらい	身近な話題について、英語で会話を続ける。 ◆重点項目◆ 相手の発言に対して質問をすることにより、会話を発展させる。	
		評 価	< 1 学期中間考査 > [Writing] ・会話を始める質問を書く。 ・質問に対する答えを40語程度の英語で書く。	
	↓			
	2 学期	活 動	How to Speak Logically	
		ねらい	身近な話題について、論理的に意見を述べる。 ※英語における「論理的な話し方」(Point→Evidence→Example)を指導。 ◆重点項目◆ PEEの順序で論理的に意見を述べる。	
		評 価	[Group Presentation] (3人グループ) ・ポスター発表 ・制限時間5分(質疑応答を含む)	
	↓			
	3 学期	活 動	How to Speak Logically ver.2 (For/Against 編)	
ねらい		より難解な話題(政治, 社会)について、論理的に意見を述べる。 ※冬休みの課題で、トピックについて各自で調査し、レポートを提出。 ◆重点項目◆ ・客観的なデータに基づいて、PEEの順序で論理的に意見を述べる。 ・平易な語彙, 表現を用いる。		
評 価		[Group Presentation] (3人グループ) ・Power Point発表 ・制限時間8分(質疑応答を含む)		
↓				
2 年	1 学期	活 動	English Chat ver.2	
		ねらい	身近な話題について、英語で会話を続ける。 [Level Up!!] リアクションのバリエーションを増やす。	
		評 価	[Group Presentation] (3人グループ) Q10: What makes you a great leader? ・Power Point発表 ・制限時間5分(質疑応答を含む) ※Academic Presentation, Team Presentationのやり方を指導。 ◆重点項目◆ ・原稿を見ないで発表する。 ・聞いている人が容易に理解できる語彙, 文法を用いて話す。	

資料3 パフォーマンステストの実施時期及び内容

1 年	1 学期	7月上旬 下旬	音読テスト① [Individual Presentation] テーマ：Great Pioneers (Lesson 2)
	2 学期	10月中旬 11月下旬	音読テスト② 音読テスト③ Michelle Obama's Speech (Lesson 8) [Group Presentation] How to Speak Logically
		3 学期	2月下旬
2 年	1 学期	6月中旬 下旬	[Group Presentation] テーマ：Great Leaders (English Chat ver.2) 音読テスト④
	2 学期	10月上旬 11月下旬	音読テスト⑤ [Individual Presentation] テーマ：What We Should Remember (Lesson 9)

※69回生の「コミュニケーション英語」使用教科書はPRO-VISION（桐原書店）である。

これらの取り組みを通して一貫して強調したことは、「相手を意識すること」「話し手／聞き手双方が対話に貢献すること」である。比較的点数化しやすいリスニング力や語彙力といった能力よりも、コミュニケーションを図る際の心構えを変化させることにより、生徒の自信を高めようと試みたのである。まずは、アイコンタクトとることや、表情を豊かにすることで相手への関心を示すという、目に見えるところから意識するよう助言した。さらに、会話は、話し手が聞き手の関心を惹きつけつつよりよく伝わるよう努力する一方で、聞き手は話し手がより話しやすくなるよう努力することにより成立するものであると、対話に貢献する姿勢に意識が向くよう働きかけた。

次に、帯学習を通しての会話練習、パフォーマンステストを行う上で留意した点について述べる。

① 帯学習

話題は学期が進むにつれより難易度の高いものに変えたが、毎学期共通して「相手への関心を示すこと」「ターンをコントロールすること」「沈黙しないこと」の3つを心得として提示した。意識づけとして、これらを生徒が使用する学習プリントに印刷し、頻繁に生徒の目につくようにした。

ジェスチャーを使う、話すスピードや音量を調節

する、相づちをうつ、キーワードを繰り返す、伝わっているかを確認する、質問するといった会話を円滑に展開するための具体的な方法は、生徒が少しずつ挑戦し慣れることができるよう、段階的に導入することとした。

質問については、生徒の認識を少し変える必要があった。多くの生徒は、質問をする前に、自分が質問しようとしていることが聞くに値するものかどうかを吟味し、つまらないことは聞かないようにしていた。その結果生じる沈黙が会話を寸断し、気まずい思いをすることが多々あった。質問は「どうしても知りたいことある場面とするもの」であるのはもちろん、「相手への関心を示すもの」「問を埋めるもの」であることを強調し、単純な質問であっても遠慮なくするよう促した。

② パフォーマンステスト

プレゼンテーション、音読テストいずれの場合にも、テストを生徒に案内する段階で評価項目と配点を明らかにした。また、ペーパーテスト同様、点数を開示し、口頭ではあるが個々に対してフィードバックをするようにした。その際、語彙や発音とったいわゆる間違いを指摘することは極力避け、相手を意識した話し方や聞き手との対話ができているかという観点での振り返り、助言に重点を置くように

した。

プレゼンテーションについては、発表の際に力を出し切ることはもちろん、聞き手一人一人が話し手にとって話しやすい雰囲気をつくるという、聞く側の対話への貢献を促した。加えて、発表者から聴衆への情報や意見の一方向の伝達に終わらないよう、発表後に質疑応答の時間を設けた。

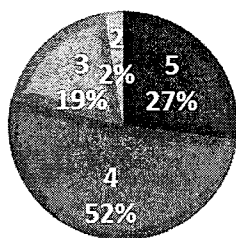
4. 成果

1年学年末には帯学習の振り返りとして、生徒の意識の変化をアンケートにて調査した。また、2年6月と11月のプレゼンテーション後には、アンケートにて生徒の自己評価を実施した。これらの資料をもとに、以下3つの観点で考察する。

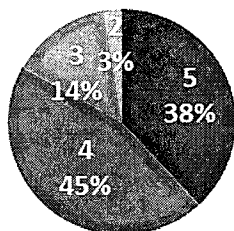
(1) 意識の変容

相手を意識した話し方／聞き方、対話の継続に関して3つの質問をした。回答はYES-NOを5段階で回答してもらった。

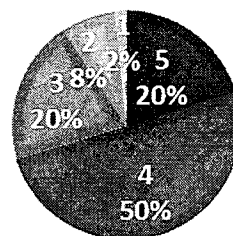
Q：自分の言いたいことを相手に理解してもらうために、話し方や伝え方を工夫しようという意識が高くなった。



Q：円滑に会話を続けるために、相づちを打つ、表情を変化させるなど相手の言葉に反応しながら話を聞こうという意識が高くなった。



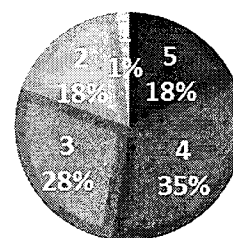
Q：沈黙しないように、自分から積極的に情報提供したり、相手に質問したりしようという意識が高くなった。



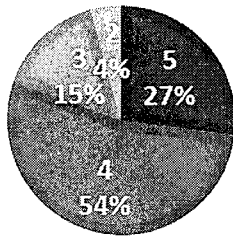
話し方／聞き方については、8割の生徒が「意識が高くなった」と回答している。この結果は、話し手、聞き手、いずれの立場から対話に貢献しようとする意識が高まったことの裏づけであり、相手を意識した方がよく伝わり、よく理解できること、互いに安心して心地よく対話できることを生徒が実感した結果である。自分からの積極的な情報提供や質問による会話の継続については、「意識が高くなった」という回答がやや少なく7割であった。これについては、自分の発話量が増えるという点で、他2つよりハードルが高いためであると推察できる。

1年学年末のアンケートでは、これらの質問に加え、英語でのコミュニケーションに対する意識の変化も調査した。

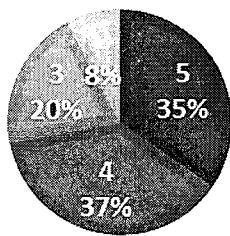
Q：英語を話すことに抵抗がなくなった。



Q：多少のミスを感じせず、コミュニケーションを図ろうという意識が高くなった。



Q：相手との会話が長くことを楽しいと感じるようになった。



相当の時間を費やして帯学習とパフォーマンステストを実施してきたが、生徒の英語を話すことに対する心理的負担は依然として大きいことが分かる。しかし、英語を話すことに自信がなかった生徒たちが、臆することなく英語を使うように、英語でのやりとりを楽しみと感じるようになりつつあることは非常に喜ばしいことである。

本校では、1年2月に台湾師範大学の学生を招き、3月には現地学習として1年生全員で台湾を訪れ、同附属高級中学校の学生とのラウンドテーブルディスカッションと、大学生の協力のもと街頭調査を行っている。118名中101名(86%)の生徒が、「コミュニケーション英語」での取り組みが、これらの活動に役立ったと回答した。授業では、日本語が通じる者同士で英語を使い、英語を使う必然性のない中での練習だが、いざ英語を使わなければならない場面につながるものであることを生徒が実感したことの意味は大きい。

私の願いは、1対1の場面でも、大勢を前にする場面でも、生徒が自信をもって英語を使うようにな

ることである。相手の存在を無視して、淡々と一方的に上手に話す人ではなく、言葉に加え、視線や表情でも相手と対話する人になってほしい。この願いに即して指導を続けた結果、生徒が考える「会話の巧さ」「発表の巧さ」が変わってきたように思う。流暢な発音で、ミスをせず、高度な表現を使うことがすごいのではない。相手に応じて、話し方／聞き方を使い分け、協力的にコミュニケーションを成立させることがすごいのである。この変化は生徒の目指す英語話者像を変え、何に重点を置くかの優先順序を変えた。以下は、アンケートの自由記述欄に書かれたコメントである。

- ・何を言っているか分かることが発表の善し悪しを議論する大前提。聞き手にとって理解しやすい英語にすることの大切さを感じた。
- ・原稿を見ないことで、より伝えることに重点を置けたし、クラス全体で自分の持っている情報を共有しようという姿勢が生まれた。
- ・大切なところ、伝えたいところ、鍵となるところを強調して、「伝える」話し方ができる人がすごいと思った。
- ・発表が上手な人は、強調したり、自然にジェスチャーを使ったり、教室全体を見回してアイコンタクトをとっていた。
- ・聞き手の態度がプレゼンの進行に大きく影響すると感じた。
- ・質問されるということは、発表内容に興味をもってもらえたということ。次回はどんな質問をされてもいいように発表内容について理解を深めておきたい。

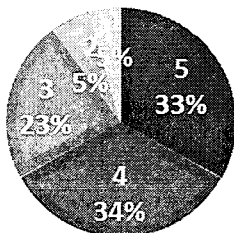
意識が変わらなければ行動は変わらない。生徒の気づきが、成長への大きな動機づけとなっていることは間違いない。

(2) コミュニケーションスキル

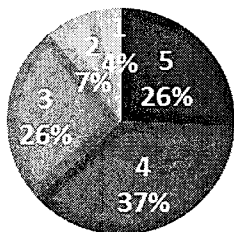
生徒のコミュニケーションスキルは、練習、パフォーマンステストを重ねるごとに上達していると感じる。多くの生徒が「うまくなりたい」と思い、努力してきた成果である。

以下のグラフは、2年6月及び11月に実施したアンケートの結果（2回の平均）である。

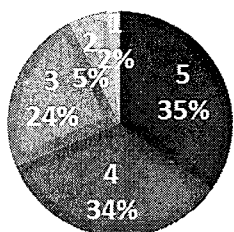
Q：聞き手とアイコンタクトをとることができた。



Q：「伝える」ことを意識して、声量やスピードを調節したり、ジェスチャーを使ったりした。



Q：相づちを打つなど、話し手の言葉に反応しながら聞くことができた。



いずれの回答も概ね同じような内訳となった。アイコンタクトや相づちは、どれだけできれば「できる」と言えるのか、その判断は難しいが、約7割の生徒が「できた」と感じていることは自信の表れである。一方で、回を重ねてなお緊張感と闘いながら発表している生徒が多いのも事実であり、帯学習で

の1対1場面から、段階的に人数を増やすようなやり方を検討する必要があるようだ。以下、生徒の自由記述である。

- ・もう少しゆっくり話せばよかったと反省していますが、練習の成果もあって、前回よりも人前で堂々と発表できたし、話し方も少しは上手くなったような気がします。
- ・「伝える」ためにアイコンタクトをとること、アドリブで相手の反応に応じて補足することを意識した。
- ・前よりアイコンタクトをとれるようになったが、視線が合いやすいところばかり見ていたので、次回は全体を見渡せるようにしたい。
- ・やり過ぎかと思うくらいの抑揚をつけた方が相手に伝わりやすいと分かった。
- ・他の人の話を聞くときに、相づちを打って真剣に聞いた。

多くの生徒が、「今回できたこと／できなかったこと」、「前回よりできるようになったこと」という観点で振り返りをしている。できたこと、できるようになったことを「できた」と言うことも、できなかったことを素直に認めることも立派だと誇らしく思う。2年生になって、発表に関して生徒間、生徒-教師間で交わされる会話の内容が充実してきた。表情やジェスチャーに対するコメントだけではなく、発表中に投げかけた質問が効果的だったか、強調した箇所が明確だったかなど、各自が意識して取り組んだ点について具体的に振り返りがなされるようになってきた。前回の発表と比較してフィードバックを求められることも多く、生徒にとって最も超えたい存在が過去の自分であることに強い向上心を感じる。

(3) 学び合い

生徒が互いに高め合おうとする姿が見られるよう

になったことも嬉しい効果である。発表が近づくと生徒たちはよく誰かと一緒に練習をしている。私はよく発表練習は鏡の前でするようにと言ってきた。自分の表情や身振り手振りを見て、相手と対話できているかを確認しながら練習するためである。そして、生徒の最終リハーサルは人間相手になった。発表者側は真剣に語りかけ、練習の成果を確認する。聞き手側は真剣に聞き、アドバイスをする。発表当日の休み時間の練習風景は実に微笑ましく、私が本番への期待を大きく膨らませる時間である。

また、アンケートの自由記述欄を読むと、生徒が本当によく人の発表に関心を持ち、よさを認め、吸収しようとしていることがわかる。話し手／聞き手いずれの立場でも相手を意識し、相手と対話しようとする姿勢がもたらした効果ではないだろうか。

- ・○○さんたちの発表はとても刺激になった。あんな風にジェスチャーを交えて自由に英語を操れるようになりたい。
- ・難しい単語を分かりやすく説明している人が多く、内容がよく伝わる発表が多かった。
- ・私も質問したり、質問にすぐに答えたりできるようになりたい。思いついたことは勇気をもって言えるようになりたい。
- ・他の人の発表では、問いかけ、話の組み立て、興味の引き方にさまざまな工夫があった。次回の発表では是非これらを真似したい。
- ・1年の時より全体のレベルが高くなり、自分も追いつけるよう頑張らないと、と強く思います。

相手の存在、話し手／聞き手双方の役割を意識することで、生徒のコミュニケーションのとり方は随分と変わった。英語での対話が生き生きと楽しいものになり、言葉に視線や表情が加わり、さらに心が伴うようになった。そして、英語を話すことへの抵抗感が徐々に軽減され、自信がついてきた。この変

化を点数化することはできないが、英語の授業以外にも、総合的な学習の時間等で多くの先生方が気づかれたように、生徒は確実に「英語を使える」人材に近づいている。

5. 課題

(1) 評価

表現の能力だけではなく、コミュニケーション能力を高めるような指導がしたい思い現在に至るが、コミュニケーション能力をどのように評価すべきか、という問いに対する明確な答えが見つかっていない。パフォーマンステストを練習の成果を発揮する場と位置付け、その機会を利用して評価を行っているが、コミュニケーションそのものが文脈に大きく依存するものであり、状況や相手が変われば全く違う展開となる以上、どの場面の何を評価対象とすべきなのか。パフォーマンステストという一場面を評価対象とすることが果たして妥当なのかと自問する一方で、1クラス40名を相手に授業を行うという現状では、普段の授業の中で個々を評価することは極めて困難である。

そもそも重点を置いた「相手を意識した話し方／聞き方」と「対話への貢献度」とは、どの程度できれば十分に身についたと言えるのか。もはや英語という教科で解決できる問題ではないと思うが、他教科の取り組みも参考に、よりよい評価の在り方を模索していく必要がある。

(2) 時間の確保

日常生活で英語を必要としないEFL環境で、英語を学び「使える」レベルに到達するには、相当量の練習が必要である。単語練習や文法学習を一人で行うことは可能だが、相手があって初めて成立する対話の練習は相手の顔を見られる場で行うのが望ましい。同じテーマで話しても、相手が違えば話の展開も変わり、2つとして同じ展開を経験することはな

い。数回発表の場を設けるだけではあまり変化は生まれにくい。しかし、生徒の気づきを促しながら練習を重ねれば、徐々に生徒の意識は変わり、振る舞いが変わり、自信がつくのだということを69回生は証明している。

限りある授業時間の中で、どれだけの時間を帯学習やパフォーマンステストに割けるか。プレゼンテーションを行うとなれば、発表後の質疑応答の時間も十分に確保したい。積極的に質問をぶつけられる生徒が増えてきたことを喜ぶ一方で、所要時間が徐々に増えていることが悩ましい。ここからの1年は、入試に向けてその対策にも相当な時間を要すると予想される。多様な入試制度が導入され、英語外部試験活用も急速に拡大しているが、本校生徒のニーズは難関大や医学部への合格である。英語を話すことへの心理的ハードルが下がり、協力的にコミュニケーションを図ろうとする姿勢が身についても、志望校不合格では本校教師の役割を果たしたとは言えない。実際、1年1学期から4学期続けた帯学習は、2年9月の教育実習で一旦途切れて以来再開できずにいる。教科書本文が長く難しくなり、教科書を使っての学習とは全く切り離れたものと位置付けてきた帯学習の時間を確保できなくなったからである。「易→難」のサイクルを繰り返すことにより定着を図るというのが、69回生スタート時の構想であったが、当初の計画が挫折してしまった。時間、生徒のニーズとどう折り合いをつけて授業を組み立てるか、これが今後1年間大きな悩みとなりそうだ。

(3) 英語使用の必然性

本校には常勤のALTがない。週1回、6時間に限ってALTが勤務し、1、2年生の「英語表現」をTTで担当している。

ALTにはさまざまな役割が期待されるが、私が最も重要だと考えるのは、英語を使う必然性を生むことである。英語を教え、異文化理解を促す役割に

ついては日本人教師に代わりが務まるが、私がどれだけ努力しても英語を使う必然性を生むことはできない。授業で行う帯学習は訓練と位置付け、英語のみで対話するというルールを決めて行っている。ミスを恐れず積極的にコミュニケーションを図ること、大胆にリアクションをとったりジェスチャーを使ったりするよう指導している。しかし、現実世界で生徒が英語を使う必要性に迫られるのは日本語でコミュニケーションが取れない場合に限られることを思うと、今の状況は物足りない。

教科SGH化の取り組みとして「英語表現I」の授業に金沢大学の留学生を招いて3年目になるが、数週間に50分の交流に過ぎない。さまざまな国からやってきた留学生と交流できるという点では優れた取り組みだが、常時学校に英語を使う必然性があれば、より大きな効果を期待できる。留学を経験すると飛躍的に変化が生まれるのは、英語を使う必然性のある環境に浸るからである。そのような環境をつくるべく、常勤のALTの採用を願ってやまない。

6. おわりに

英語運用能力、コミュニケーション能力の育成に際し、これらの能力の本質を問うことは避けて通れない。文脈依存度が高く、流動的で、パターン化することが非常に困難な能力であるからこそ、具体的な態度や技能に落とし込んで解釈することが大切なのではないかと思う。

私は、「英語を使える」人材の育成と大学入試への対応が全くの別物だとは思わない。重なり合う部分が大いにあり、両立させることができるはずだ。志の高い優秀な学生が、大学入試の先に「英語を使える」自分を思い描いて英語学習に取り組みれば、どれほど有能な英語話者が生まれるだろうか。目の前にある大きな可能性に挑むなかで、よりよい実践を追求していきたい。